

5～6歳児に体を教える「からだフシギ」プロジェクトのこれまでとこれから：さまざまな場所に求められるPeople-Centered Nursing Care

| | |
|-----|---|
| 著者 | 瀬戸山 陽子 |
| 雑誌名 | 聖路加看護学会誌 |
| 巻 | 21 |
| 号 | 1-2 |
| ページ | 68-70 |
| 発行年 | 2017-07-31 |
| URL | http://doi.org/10.34414/00015288 |



5～6歳児に体を教える「からだフシギ」プロジェクトの これまでとこれから

瀬戸山 陽子

I. はじめに

5～6歳児に体を教える活動を始めて、今年で14年目になる。先のシンポジウムでの発表は、改めてこれまでの活動を振り返る機会となった。本稿では、シンポジウムの報告内容に関して、筆者たちの問題意識や活動の実際、評価等について述べる。

II. 活動の発端となった問題意識

People-Centered Care は、市民が主体者である（山田, 2004）。これを実現するには、市民自らが健康医療情報にアクセスし、理解・判断して、行動するための能力であるヘルスリテラシー（Nutbeam, 2000）の向上が欠かせない。

しかし、健康医療情報を活用する以前に、体に関する基本的な知識をもたなければ、情報を理解・判断することは難しい。たとえば、検査で肝臓の異常を指摘され治療することになっても、そもそも肝臓がどこにあるのか、肝臓にどのような働きがあるのかを知らなければ、主体的に情報を集め、医療者の説明を理解して意思決定することは困難である。このような問題意識から、筆者たちは、まず体の知識が市民の常識になることが必要であると考へた。そして、聖路加看護大学21世紀COEプログラム「市民主導型の健康生成のための看護拠点形成」におけるプロジェクトのひとつとして、2003年に5～6歳児に体を教える活動を開始した。

III. なぜ5～6歳児なのか

筆者たちは、体の知識を市民の常識にするために、子どもに体の知識を伝えたいと考へた。対象年齢の決定とプログラム開発を行うために、養護教諭へのヒアリングと既存の取り組み把握を行っている。そこから、「子どもは体に関心を持っているが、小学校で集団になると無関心を装う」「小学校以上ではカリキュラムがきっちり定まっており余裕がない」などが示された。これらを受けて筆者たちは、未就学児である5～6歳児を対象として



図1 消化器系を表したTシャツ

体の教育を行うことを決めた（菱沼ら, 2006）。

IV. プログラムと教材開発及び実際のプログラム

筆者たちは、5～6歳児に正しい知識を系統的に伝えることを目指して、プログラムを、①神経系、②循環器系、③消化器系、④泌尿器系、⑤呼吸器系、⑥運動器系、⑦免疫系、⑧生殖器系の8系統（のちに内容を変更）で構成し、教材として、5～6歳児が自分で読める体の絵本を開発した。また、循環器系では、子どもに心音を聞いてもらうために聴診器を準備し、消化器系では、食道、胃、小腸、大腸、肛門が立体で分かるようなTシャツを作成した（図1）。実際のプログラム例を表1に示す。プログラムの提供方法は、メンバーが保育園や幼稚園、地域図書館等に出かけて実演を行う「キャラバン」形式とした（瀬戸山ら, 2017；菱沼ら, 2006）。

V. 活動メンバーの広がり と NPO の設立

活動メンバーは当初、看護師や医師など学内の者が中心であったが、次第に、ライターや保育士、幼稚園教諭、保護者、養護教諭など、多様な立場の者が関心を持って集まるようになった（菱沼ら, 2006）。メンバーの広がりには、単に多様な者が集っただけではない。たとえば、ライターである者が広報用パンフレットを作成したり、絵本作家や出版社のメンバーと協働で絵本を出版したり

表1 保育園で行った「体のお話し会」の実際のプログラム例（消化器系）

| 時間割 | 内容 | 備考 |
|-------------------|--|--|
| 10:30~10:33 (3分) | あいさつ・手遊び （「消化器系」のプログラムなので、お弁当づくりの手遊び） | 子どもたちが集中して体の話を聞けるように、最後は小さい「ねずみさんのお弁当」をつくって静かに終わるようにする |
| 10:33~10:45 (12分) | 紙芝居「消化器系」 | 問いかけながらゆっくり進める |
| 10:45~10:57 (12分) | からだTシャツ（図1）で食べ物の通り道を復習 | 通り道に沿って、ひとつずつ器官をはずす。小腸の長さを確認する |
| 10:57~11:10 (13分) | からだTシャツを触って遊ぶ | 子どもに、臓器をはずしてもらい、触ってもらった後に、正しい位置に戻してもらう |
| 11:10~11:15 (5分) | 質問タイム からだフシギ（歌を流す） 終わりのあいさつ | |

（ナムーラ・ミチヨ，2013），保育士や幼稚園教諭が、プログラムの最初に行う手遊びを考案するなど、各人がそれぞれの専門性を生かして、主体的に活動に参加するようになった。

また、多様なメンバーがよりフラットにディスカッションをし、地域や他の組織と協働していくために、活動開始当初の「研究会」という顔を残しつつも、2014年7月に「NPO 法人からだフシギ」を立ち上げた。

VI. 活動の評価

評価では、まずプログラムのわかりやすさ（松谷ら，2007）や、教材評価（後藤ら，2008）を示した。また、子どもや保護者にもたらされた変化など、活動のアウトカムに関しても検討を行った。その結果、体を学んだ子どもは、「『おなか』といていたものを『胃や腸』という」など【からだの仕組みの理解】を示した。また、実際に「栄養のあるものをバランスよく食べる」など、根拠をもって望ましい行動をとるといった、自分を大事にする行動がみられた（大久保ら，2008）。

VII. 「専門職が教える」から、「子どもに身近な人が教える」へ

プログラムの提供方法は、当初、活動メンバーが保育園等へ出向くキャラバン方式であった。しかし、この方法では子どもにとって体を学ぶことが非日常のままであり、持続性・継続性に乏しかった。また、マンパワーの問題で、活動の普及に関しても限界が感じられた。そこで近年、子どもにより身近な保育士や幼稚園教諭、保護者らが、日常的に子どもに体を教えられるようになるための「研修会」を開始した。2016年度には延べ48人が研修会を受講し、うち数人はすでに、自らのフィールドで子どもに体を教える取り組みを行っている。

VIII. おわりに

5～6歳児が体を学ぶことは、いじめや暴力、学級崩壊、感染症など、子どもを取り巻く多くの健康課題のなかでは、緊急度や優先度が低いかもしれない。しかし前述のとおり、子どもは体を知ると、自ら自分と周囲を大事にする行動をとるようになる。この現象は養護教諭らの実践活動でも記録されてきた（清水ら，1993）。また子どもに体を教えることは、海外でも取り組まれている（藤田，2013）。

10年後、20年後、50年後の社会をつくる子どもたちが、自分も周囲も大事にしながら健康の主体者となれるように、体の知識が市民の常識となるまで、活動を続けていきたい。

活動については、「からだフシギ」のブログ（<http://npokarada.blogspot.jp/>）をご覧ください。

謝辞

第22回聖路加看護学会での発表や本稿執筆の機会をいただき、大会長の亀井智子先生および企画委員の先生方に、心より御礼申し上げます。

引用文献

- 藤田水穂（2013）：日本およびフィンランドの小学校教科書における人体や健康に関する教育の比較。文化看護学会誌，5（1）：28-34。
- 後藤桂子，菱沼典子，松谷美和子，他（2008）：5～6歳児用「からだの絵本」に対する市民からの評価。聖路加看護学会誌，12（2）：73-79。
- 菱沼典子，松谷美和子，田代順子，他（2006）：5歳児向けの「自分のからだを知ろう」プログラムの作製；市民主導の健康創りをめざした研究の過程。聖路加看護大学紀要，32：51-58。
- 松谷美和子，菱沼典子，佐居由美，他（2007）：5歳児向けの「自分のからだを知ろう」健康教育プログラム；消化器系の評価。聖路加看護大学紀要，33：48-54。

- ナムーラ・ミチヨ (2013): からだドックンドックン……. 聖路加国際大学からだ教育研究会 (監), 赤ちゃんとママ社, 東京.
- Nutbeam D (2000): Health literacy as a public health goal: a challenge for contemporary health education and communication strategies into the 21st century. *Health Promotion International*, 15 (3): 259-267.
- 大久保暢子, 松谷美和子, 田代順子, 他 (2008): 幼稚園・保育園年長児向けのプログラム「自分のからだを知ろう」に対する評価指標の検討. *聖路加看護大学紀要*, 34: 36-45.
- 瀬戸山陽子, 菱沼典子 (2017): 地域図書館における子どものヘルスリテラシー向上を目指した取り組み: 年長児にからだを教えるプログラムの実践と評価. *保育と保健*, 23(1): 94-99.
- 清水良子, 安川恵美子, 中村恵子 (1993): 養護教諭と担任教諭の共同実践 (2): からだがわかれば子どもが変わる. 農山漁村文化協会, 東京.
- 山田 緑 (2004): People-Centered Care: 概念分析. *聖路加看護学会誌*, 8 (1): 22-28.